The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語と中国語の空間表現に関する対照研究 : 上方向に関わる表現を中心に
Author(s)	嚴, 馥
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54326
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【12】

氏　　名	嚴（ゲン）　馥（フク）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３２９７　号
学 位 授 与 年 月 日	平成21年６月30日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**日本語と中国語の空間表現に関する対照研究－上方向に関わる表現を中心に－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　西口　光一 （副査） 教　授　深澤　一幸　　准教授　瀧田　恵巳

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では日中両言語における上方向に関わる空間認知の異同を、語彙的ネットワークの考察結果に基づき解明することを試みた。中国語の方位詞としての“上”と日本語の「上」及び、中国語の方向動詞・方向補語としての“上”と日本語の「あがる/あげる」を研究対象とし、その意味の側面から着手し、空間表現と空間認知の関連を考察した。これらの語の意味についての先行研究は主に記述的な研究である（宮島 1972、森田 1989、吕叔湘 1980、刘月华 1998、孟琮 1999）。しかし、言葉は「主体が外部世界を認識し、この世界との相互作用による経験的な基盤を動機づけとして発展してきた記号系の一種」（山梨 1995:2）である。即ち、言葉は記号であるが、人間の知覚に基づいて形成された概念の反映でもある。語の意味の記述だけでは言語の表面的な現象に止まっており、その背後にある認知の部分を解明することができない。そこで、本論文では多義語研究の手法を援用し、各々の語の語彙的ネットワークを分析し、それを基に、中国語と日本語という個別言語における空間認知の仕組み及び、中国語対日本語という異言語間の空間認知の仕組みの異同を考察した。

本論文は7章から構成される。本論文の前半（第1章から第3章）は静的な場所・位置の関係を表す上方向に関わる空間表現（以下、静的な上方向表現という）について考察した。第1章と第2章で中国語の方位詞としての“上”と日本語の「上」の語彙的ネットワークをそれぞれ考察し、その空間認知の特徴を明らかにしたうえで、第3章で両者の異同を対照して検討した。次に、論文の後半（第4章から第6章）では動的な移動関係を表す上方向に関わる空間表現（以下、動的な上方向表現という）について考察した。第5章と第6章では、中国語の方向動詞・方向補語としての“上”と日本語の「あがる/あげる」の語彙的ネットワークをそれぞれ考察したうえで、静的な上方向表現の表す空間認知の特徴との類似点を比較した。更に、第6章では日中両言語における上方向表現の異同を対照して検討した。そして、最後の第7章の結論では、6章までで明らかにされた語彙的ネットワークを基に、中国語と日本語における空間認知の仕組みの異同について検討した。

本論文の考察により、語の意味記述を主とする先行研究では明らかにされていない空間認知の仕組みが語彙ネ

ットワークという図形の形で明らかになった。語彙的ネットワークを基に、個別言語における空間認知の仕組み及び異言語間の空間認知の仕組みの２点を検討した結果、各言語における上方向の空間認知については、中国語においても日本語においても、静的な上方向表現と動的な上方向表現の表す空間認知の仕組みには類似性があることが分かった。つまり、中国語の場合は「上の方向性の消失」と「付着」の２点で共通し、日本語の場合は「内部から外部への方向性」で共通している。一方、異言語間における上方向の空間認知については、同じ上方向の空間概念について、異なる言語では認知の仕組みに違いがあることが分かった。中国語の上方向表現では意味の拡張に伴い、上の方向性が消失する現象があるが、日本語の上方向表現の意味拡張では上の方向性が終始保持される。また、日本語の上方向表現の意味拡張は内外の空間概念との関連が発達しているが、中国語の上方向表現の意味拡張では、それはあまり見られない。日中両言語における意味拡張の相違は、《表面》という意味への拡張で最も顕著に現れている。中国語における表面の空間はあらゆる方向性の表面となり、移動物が付着する表面のイメージである。それに対し、日本語における表面の空間は基準物の内部から外部への認知視線により内外概念と関わりを持ち、基準物の全体を包むイメージとなる。

主要参考文献
宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所（編）秀英出版
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
吕叔湘主编（1980）『現代漢語八百詞』商务印书馆
孟　琮（1999）『汉语动词用法辞典』商务印书馆
刘月华主编（1998）『趋向补语通释』语言文化大学出版社

論文審査の結果の要旨

本論文は、多義語研究の手法を用いて、日中両言語における上方向に関わる空間表現の語彙的ネットワークを分析し、それを基に中国語と日本語という個別言語における空間認知の仕組みの特徴、及び中国語対日本語という異言語間の空間認知の仕組みの異同を明らかにしたものである。

本論文では、序章で研究対象の措定と研究方法についての議論を行った上で、第１章と第２章で静的な上方向表現として中国語の方位詞の‘上’と日本語の「上（うえ）」について，第４章と第５章で動的な上方向表現として中国語の方向動詞・方向補語の‘上(shang)’と日本語の「あがる/あげる」について，説得力のある語彙的ネットワークを提示し、各表現の空間認知の特徴を明らかにしている。そして、そうした分析を基に、第３章で静的な上方向表現について，第６章では動的な上方向表現について，日中両言語の異同を対照的な観点から検討し、第７章では包括的な議論として中国語と日本語とにおける空間認知の仕組みの異同を検討している。このように本論文では極めて整然と議論が展開されており、論文の各部では必要な先行研究や認知言語学の研究手法についての議論が周到に盛り込まれており、きめ細かい考察に基づいて緻密に議論が進められている。また、例文も、作例ではなく、適切なコーパスから抽出した用例を使用している。そして、必要に応じて他言語の認知言語学的研究にも言及している。

こうした周到な考察と議論の結果、(1)静的な上方向表現と動的な上方向表現が表す空間認知には各言語内で類似性があること、すなわち中国語の場合は「上の方向性の消失」と「付着」の２点で共通し、日本語の場合は「内部から外部への方向性」で共通していること、(2)中国語の上方向表現では意味の拡張に伴い上の方向性が消失する現象があるが、日本語の上方向表現の意味拡張では上の方向性が終始保持されること、(3)日本語の上方向表現の意味拡張は内外の空間概念との関連が発達しているが、中国語の上方向表現の意味拡張ではそれがあまり見られないこと、(4)中国語における表面の空間はあらゆる方向性の表面となり移動物が付着する表面のイメージになるのに対し、日本語における表面の空間は基準物の内部から外部への認知視線により内外概念と関わりを持つこと、など両言語での空間認知の仕組みについて興味深い結論を得ている。

このように本論文は、上方向表現について日中両言語の空間認知の仕組みを巧みにあぶり出すことに成功しており、学術的に価値のある成果を得ている。また、単なる記述的研究にとどまらず、空間認知の仕組みにまで検討し得たことは本研究の独自性を示すところであり、今後の認知言語学的な対照研究の一つの方向性を示している点も本論文の学術的貢献として挙げることができる。

以上のように、本論文は博士号学位（言語文化学）論文として、十分に価値のあるものと認められる。